

『頑張らなくても、目が覚めたら終わってる』

福井 勲

最初の麻酔の記憶は、二十代の前半で蓄膿症の手術を受けた時だ。同室の年配の患者さんは麻酔が効かないですごく痛かったと話していました。手術まで何段階かの麻酔があつて、私は病室で軽いのをしてもらったらすぐ効いてきました。後で、酒を飲まないからよく効くのだと教えてもらった。もう六十年近く前の話で、今もあてはまるかどうかのわからないのですが。

後年、がんと診断され、転移もあり、大小の手術を何回かうけてきました。そのたびにお世話になっているのが、痛みを知らずに手術をしてもらえる麻酔のおかげです。

手術の前日、麻酔科医が病室に来られます。いろいろ説明してもらえます。体調をきかれたり、それも大切なこととは思いますが、患者にとって手術の前日はとても不安なのです。麻酔医のお話でその不安が少し安心というか、心が和らぐ感じがしてきます。何度かの手術で麻酔受けベテラン（？）の私は、「何度も受けています。安心して手術に臨めます」と、感謝の気持ちをささげる余裕です。

病室から手術室に運ばれるとき、家族や親せきのおばちゃんらは、「頑張つてね」と、手話の握りこぶしを作ってエールを送ってく

れます。声援はありがたいことですが、内心は、「患者の私が、頑張るも頑張らないもあるものか。麻酔薬で気を失っているのだから、手術中は、患者自身の努力も何もないの。麻酔が覚めたらみんな終わっており、頑張るところなんてない」と、いいたいのですが、そこは「ありがとう、頑張るよ」と、目で感謝をしめします。

一度だけ、麻酔前の記憶がどこまであるか試そうとしたことがありました。手術台にのせられ、「麻酔入れます」という言葉がひびき、私は記憶してやろうと身構えた。「シューツツ」と、音がしてそこで私の意識は途絶えまた。麻酔に負けず頭脳に刻んでやろうと思っていたのに。麻酔には勝てませんでした。

眼が覚めた時、医師の笑顔が飛び込んできた。「悪いところ、きれいに切除したからね」。そして妻と対面。「よかった、よかった」と。

麻酔が苦しい痛みを消して、苦悶もせず、まさに眠っているうちに、悪魔を追い出してもらえたのだ、ありがたい。今の世の中、あたりまといえそうですが、もし麻酔がなかったらと思うと恐ろしい気がしてきます。手術の成功には、見えないところで麻酔医師の大きな力があります。あまり気付かないのですが。麻酔医がいなければ、手術は成立しないのだと改めて感じます。

小さいころからよく病院のお世話になりました。八十路近い年齢になるまで、何回か痛い思いもせずに手術をしていただきました。

今も元気に生きておられるのは麻酔のおかげなのだ。

手術中、頑張らなくていいのだと、感謝感謝です。